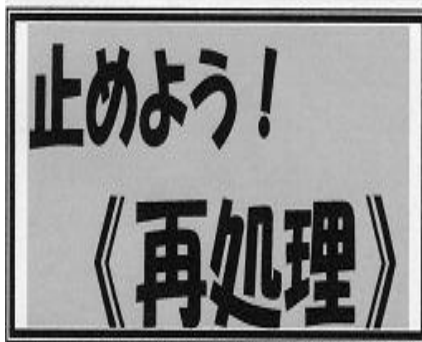


三陸の海を放射能から守る 岩手の会

郵便振替 02240-5-102650
ホームページ《再処理／岩手の環境》
<http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm>



《天恵の海》

2013(平成25)年
12月10日
第134号
編集事務局 S.Oshida
TEL・FAX 019-623-1636

～ いっしょに語ろう! 考えよう! 育て みんなの市民力!～ Power to The People in いわて 第3回 放射能問題市民交流会 11月24日



岩手の各地で放射能から いのちと健康を守る運動を

十一月二四日、盛岡市内で、放射能問題に取り組んでいる岩手県内の市民グループの有志二〇余人が集会を持ち、第三回放射能問題市民交流会を開催しました。

発表レポートは、福島原発事故由来の放射性物質による被害状況や放射性物質から健康を守る運動、行政への要請行動、放射性物質の環境汚染防止の法律体系の整備に関わる行動、有機農業実践や遺伝子組み換え食品問題、さらには、市民運動のミニコミ作りなど多岐に亘る内容でした。そのうちから、「放射能汚染の牧草やホダ木の一般焼却炉での焼却問題」「福島原発沖合の水産物の調査結果」「国際リニアコライダー」への疑念の三点について報告します。

(取材・文責 尚)

岩手県内の汚染報告

山菜とトウモロコシ

各グループが把握している放射能汚染の測定結果を出し合いました。

盛岡のグループは、「測定器を購入し、県内から約一七〇〇体の検体を委託され測定した。特定箇所(土壌やゼンマイ、コシアブラなどの山菜にセシウム134・137が七六ベクレル、二八〇ベクレル/kg、薪ストーブの残り灰からは一四三〇ベクレル/kg

gなどの測定結果が出た。今後も充分警戒するべき」との報告がありました。

県南を中心に活動しているグループから「岩手県内三一六箇所の土壌を集め集計した。岩手県南で警戒すべき測定値があり、対策が必要である」と報告されました。

焼却しても放射能は フィルターで除去出来ない

一戸町の発表者からは、「三・一一事故による汚染牧草がかなり集積されており取り扱いに困っている。牧畜農家は、仔ウシが売れず廃牛のために莫大な損害を受けた。東電が一方的な加害者であるのに、損害賠償の折衝は被害を受けた地区の各農家が困難な交渉を続けている。該当農家だけでなく町全体での支援が広がってほしい。置き場に困る汚染牧草は黙ってれば燃やされてしまう状況にある」と語りました。

矢巾町のグループからは「震災以降、町役場当局と掛け合って、食品などを測るNaI放射線測定器を三台設備し

て戴いた。原発事故によりシイタケのホダ木が約五〇〇六〇ベクレル/kgなどと汚染され、ある地区に山積みされている。町当局はこのホダ木を一般焼却炉で燃やそうとし、その当該地区の住民だけに説明会を開催した。私達は燃やすことは灰や排出ガスを通じて環境に放射能を撒き散らすとして反対し、とりあえず廃校の中学校の体育館への貯蔵を提案した。しかし、当局は予算が付いたからとして方針を変えようとしな」と訴えました。

焼却反対と補償は別だ

沿岸部に住む発表者は「椎茸栽培をして来たが放射能被害を受けた。農協を通じて被害の補償を要求したが、今年に入り、『五年分の補償額』が査定され、補償金が出た。加害者の東電が支払ったものと解釈し少しは溜飲がおりた。しかし岩手県が肩代わりしたもので、岩手県は東電に請求しているとのこと。これでは負担が、一般国民の税金にすり替えられる。また、わが家の椎

福島事故の海洋汚染 『水産総合センター報告書』から

茸で、基準の百ベクレル／kg になったものを町役場の人がやってきてトラックに積んで持って行ってしまった。その椎茸は燃やされたかも。私は補償をもらって、放射能汚染した椎茸もホダ木も焼却には反対だ」と述べました。

一関の参加者から「東電と直接交渉し、ホダ木を測らせた。一回目セシウム134・137が一八〇ベクレル／kg、二回目一四〇ベクレル／kgと

出た。やつとの事で東電に損害を認めさせ補償金を出させた」という事例の報告がありました。

行政へ対策要求

盛岡市のグループから「市議会に学校幼稚園などの除染基準値の引き下げを請願した。除染基準値を0・19μSv/hまで引き下げることについて採択した」という報告がありました。平泉や金ヶ崎のグループから「二つの請願を県議会に提出した。特に『子どもの健康調査継続について』ぜひ採択させたい」という報告がありました。



(独) 水産総合センター『平成二四年度放射性物質影響解明事業報告書』は http://www.fra.affrc.go.jp/eq/Nuclear_accident_effects/final_report.pdf

「岩手の会」永田文夫さんが昨年度の「海洋調査報告書」をもとに放射性セシウムの測定値を報告しました。

【岩手県沖】今年一月から九月にかけてマダラの約八割から二〇五〇ベクレル／kg 検出、ヒラメは約五割から七〇一二ベクレル／kg、その他は一Bq／kg以下か、不検出。

【宮城県沖】出荷制限がスズキ、クロダイ。金華山以南の出荷制限がヒガンフグ。マダラは本年一月に、ヒラメは八月に出荷制限解除。

【福島県沖】福島第一原発の半径二〇kmは操業禁止とされている。その禁止海域の外側で試験操業がなされた。昨年六月から水深一五〇m以上のタコ、イカ、カレイなど一八種が試験操業

された。三・一一以降のクワナゴ、シラスの測定が時系列で公開されているが、今年度に入ってから不検出となっており、この結果からと思われるが、本年九月に水深約五〇m以浅が試験操業とされた。しかし汚染水タンクからの液漏れがあり、常時海水へストロンチウムも放出されている。今は魚のストロンチウム濃度が公表されないうちは摂取を控えた方がよい。

【茨城県沖】出荷制限されているのはシロメバル、スズキ、ニベ、コモンカスベ、マダラ。県北で制限はヒラメ、イシガレイ、気がかりな魚)

◆仙台湾の阿武隈川河口沖合約三kmで海底土からセシウム137が五〇七四Bq／kgという異常値が出ている。阿

ILC: 最終処分場の疑念

国際リニアコライダー(ILC)は、北上山地地下に五十kmもの直線のトンネルを掘り、加速器で陽電子と電子を衝突させ「ビッグバン」を再現し宇宙の成り立ちと構造を解き明かすのだといえます。県・マスコミ・関連自治体はその誘致に熱を上げています。

発表者から、『核のゴミ』の再処理の方法としてプルトニウムなど長く放射能を出し続ける原子に中性子を衝突させて半減期が短い原子に変えようとする『核変換技術』というのがあるが、ILCと共通する部分があり、警戒が必要だ」という問題提起があり

武隈山地の森林の水を集めて流れてくる阿武隈川は放射性物質を海に運んでいる。海底土からプランクトン、海藻、小魚、そして人間へ。食物連鎖によって放射性物質は濃縮される。

◆何よりも事故炉の冷却汚染水から高濃度ストロンチウム90の漏えいが報ぜられている。体内へ入るとなかなか

排出 せず骨ガンや白血病の原因となる。民間での測定は難しく、公的な測定で数値が下がるまで警戒が必要。

◆福島原発汚染水は、安倍晋三首相が「管理されている」と発言したが、外海でも放射性セシウムが高濃度で測定されるなど、いまだに原発港湾内から外海へ漏れ出していることが分かる。

ました。そしてアメリカのIEERという研究機関の『廃棄物の核変換・核の錬金術というギャンブル』という論文を紹介しました。論文では「莫大なエネルギーを使い大量の中性子を捕獲する時長寿命放射性核種の生成も誘起する。その照射においても目的の放射性物質を群分離する技術は難しい。生まれる原子も次々に変換し更なる危険な放射性物質に変わる恐れ(大きなリスク)がある。従って予測出来ない高価な方式である」と論述し「この方法は健全な科学技術的基盤がない以上廃棄物管理技術としては放逐すべだ」と警告しています。

意見交換では、「地下トンネルがさらに掘られ巨大な高レベル放射性廃棄物埋設場にすり替えられないか?」「当初計画で約八千億円。そのお金が岩手の地域経済振興につながるか? お金は大地震復興に使われるべきだ」「本年五月に茨城県原子力研究所加速器実験区域(JPARC)で実験中に放射能漏れ被ばく事故があった。もっと本質的議論が必要である」などが出されました。

『原発ゼロ社会への道』
- 新しい公論形成のための中間報告
原子力市民委員会 2013年10月
来年春の『脱原子力政策大綱』策定をめざしこの中間報告に対するパブリックコメントを求めています。
原子力市民委員会事務局
〒160-0004 東京都新宿区四谷1-21 戸田ビル
高木仁三郎市民科学基金内
<http://www.ccne.japan.com>